

【今日の説教から】

またも弟子たちは戸をしっかりと閉ざしていました。彼らは未だ恐れの中にありました。この箇所ではよくトマスの不信仰と回心が語られますが、他の弟子たちも五十歩百歩であることが分かります。

トマスは自分が集会に出ていなかったことにより復活の主に出会い損ねたという状況の中にあり、なおかつ他の弟子たちの、復活の主に出会ったという証言をそのまま額面通りに自分の信じるどころとすることもできずに悶々としていました。彼は聞いたことを信ぜよとの目撃者たちからのプレッシャーのゆえに、心をかたくなにしたのでしょうか、それとももとの性格だったのでしょうか、自分の目で見、それも主の傷跡に手を差し入れてでも確認しなければ信じないぞと宣言しました。主の手のひらの釘の傷の後に指を差し入れ、わき腹に手のひらを差し入れてみなければ信じないと言いましたが、そこまでするといのはいかにも異常です。主がいたらそんなことは恐れ多くて出来ないはずです。しかしそこまですなければ信じないというのは、見たのに未だ恐れている他の弟子たちを見ていたせいかもしれません。

いずれにしても、主は彼らに再び現れ、真ん中に立たれました。主はトマスの言葉を聞いておられ、あなたが信じられるまで好きなようにしたらよいと語られます。トマスはたまらずにひれ伏します(おそらくそうしたでしょう)。私たちの前にもわが主、わが神はいつも共にいてくださいます。

四月も最後の礼拝となりました。ゴールデンウイークに入り、ご家族が帰られたり、田植えなどもあり、気ぜわしくお過ごしでしょうか。

今日も主のご復活とペンテコステの間の時に行く弟子たちの様子を御言葉から読み進めたいと願います。

20:24 十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれているトマスは、イエスがこられたとき、彼らと一緒にいなかった。

20:25 ほかの弟子たちが、彼に「わたしたちは主にお目にかかった」と言うと、トマスは彼らに言った、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」。

20:26 八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスがはいつてこられ、中に立って「安かれ」と言われた。

12弟子のひとりのトマスが登場します。

ここでは彼の不信仰と回心が語られるのですが、8日経っても、主の復活を見て、彼らの中

心に立たれ、息を吹きかけて励まし、魚を食べてそのお姿を主がお見せになっても、そして私があなを遣わす、だれの罪でもゆるされるから行きなさいと主が言われても相も変わらず戸を閉めて鍵をかけて同胞ユダヤ人たちを恐れているほかの弟子たちも五十歩百歩だなあと思うのです。トマスは元来、以下のヨハネ 11 章の御言葉にもありますが、迫害をも恐れずにエルサレムの東わずか 3 キロメートルのベタニアの村に行こうとされるイエス様を見て、ほかの弟子たちが石打とにされかかったのにまた行かれるのですかというのをよそに、「わたしたちも行って、先生と一緒に死のうではないか」とまで言う勇者でした。

ヨハネ 11:1 さて、ひとりの病人がいた。ラザロといい、マリヤとその姉妹マルタの村ベタニアの人であった。

11:2 このマリヤは主に香油をぬり、自分の髪の毛で、主の足をふいた女であって、病気であったのは、彼女の兄弟ラザロであった。

11:3 姉妹たちは人をイエスのもとにつかわして、「主よ、ただ今、あなたが愛しておられる者が病気をしています」と言わせた。

11:4 イエスはそれを聞いて言われた、「この病気は死ぬほどのものではない。それは神の栄光のため、また、神の子がそれによって栄光を受けるためのものである」。

11:5 イエスは、マルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。

11:6 ラザロが病気であることを聞いてから、なおふつか、そのおられた所に滞在された。

11:7 それから弟子たちに、「もう一度ユダヤに行こう」と言われた。

11:8 弟子たちは言った、「先生、ユダヤ人らが、さきほどもあなたを石で殺そうとしていましたのに、またそこに行かれるのですか」。

11:9 イエスは答えられた、「一日には十二時間あるではないか。昼間あるけば、人はつまづくことはない。この世の光を見ているからである。

11:10 しかし、夜あるけば、つまづく。その人のうちに、光がないからである」。

11:11 そう言われたが、それからまた、彼らに言われた、「わたしたちの友ラザロが眠っている。わたしは彼を起しに行く」。

11:12 すると弟子たちは言った、「主よ、眠っているのですしたら、助かるでしょう」。

11:13 イエスはラザロが死んだことを言われたのであるが、弟子たちは、眠って休んでいることをさして言われたのだと思った。

11:14 するとイエスは、あからさまに彼らに言われた、「ラザロは死んだのだ」。

11:15 そして、わたしがそこにいあわせなかったことを、あなたがたのために喜ぶ。それは、あなたがたが信じるようになるためである。では、彼のところに行こう」。

11:16 するとデドモと呼ばれているトマスが、仲間の弟子たちに言った、「わたしたちも行って、先生と一緒に死のうではないか」。

ですから彼が、自分がそこまでして、自分の指を主の釘に刺された傷跡に差し入れて、自分の手のひらをその深いわき腹の傷に差し入れなければ信じないという異常なまでの言葉を放つということは、しっかりと見て、出会った者たちがその後相も変わらずに恐れおののいているのならば、そんなのは幻想に過ぎなかったのではないかと、主に出会った気になっていだけで、本当はそうではなかったのではないかと、他の弟子たちの姿を見ていてそう語らざるを得なかったのではないかと考えられるのです。

どうして復活の日、トマスは弟子たちと共にいなかったのでしょうか。それは知る由もありません。どうしてその日、クレオパともう一人の弟子が、議論でもちきりであったエルサレムの地を離れて、ほかの弟子たちとの交わりから離れてエマオに旅立ったのかも含めて不明ですが、相互の交わりと慰めに軋みが出かかっていたとすることはできるのではないのでしょうか。

復活のイエス様は何度も彼らの真ん中に立たれました。そうです、イエス様は昔も今も弟子たちの、信じる者たちの真ん中におられる方です。しかしそのイエス様が本当に教会の真ん中におられるのか、またイエス様が私の全存在の真ん中におられるのかということが不案内になり、確信が揺らぐことがあるのです。

そんな弟子たちの交わりの中で、トマスははっきりと、その最も大切なことを、自分のすべての観察力と理性とを用いて確認したいと思ったのです。ほかの連中が見たのにもかわららずそのあとで全くしゃっきりとしていないことに怒りさえ覚えて、彼は自分ならばはっきりと確認して、いざ了解したならばそれからは全くの迷いもなく命を懸けると心に誓ったのでした。

20:25 ほかの弟子たちが、彼に「わたしたちは主にお目にかかった」と言うと、トマスは彼らに言った、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」。

この異常なまでの彼の確認のプロセスは、彼の並々ならない、確かにイエス様だと確認して信じたい、それが出来たならば二度と迷わずに突き進むのだという決意の裏返しでもあるのだと思うのです。

私たちは得てしてそこまで自分を追い詰めないのではないのでしょうか。そこまでして信じて、もしもかなわなかったらしんどいから、がっかりするからと、祈り願うときでも、おそらく実現可能な程度に願いをとどめるというようなことはないのでしょうか。私たちの父母にプレゼントを頼むときに、その懐具合を考えてから、実現可能な、聞き入れられるちょう

どよい程度の願いをするように、神様にもそのような、いわば保険をかけたような祈り願いをすることはないでしょうか。

しかしトマスはあるいは幻でも構わない、実体かどうか、肉薄して、傷に触れて、わき腹に手を差し入れて、もしも幻が霧散してしまったらがっかりするなどということは考えずに、彼はイエス様の実体に触れるところまで求め続けたのです。そのうえでもしも実体がなければもうそれまでだということにまで彼は進み出たのです。

20:26 八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスはいってこられ、中に立って「安かれ」と言われた。

それから1週間が過ぎました。弟子たちはまた元の木阿弥で戸を閉めて恐れています。トマスは今度は彼らと共に、おそらく復活の日の1週間後の日曜日、この時こそはとの思いで目を見開いています。

イエス様はまたも彼らの真ん中に立たれました。そして前週と同じように「安かれ」と語られるのです。主は教会の真ん中にいらっしゃる、私たちの全存在の真ん中にいらっしゃる、そこに平和と平安と調和があるようにと祈られます。主が真ん中におられなければ平和も平安も調和もありません。今の世界がそれを物語っています。イエス様を外に追いやって、人が、自分が真ん中にしようとするその集まりは、どんなに強大であるように見えても、真ん中に主が立っておられなければ、それしむなしいものです。

20:27 それからトマスに言われた、「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。

主はトマスの語ることを、彼の、実体あるイエス様に再会して、誰よりも深く信仰を確認してから主に命をささげたいとの願い祈りを深く聞いておられました。

主は、さあ指を貫通された手の傷に差し入れ、手のひらを割かれたわきに差し入れなさい、そして確認し、確信しなさいと願われました。しかし主はこう言われました。

「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」

これは今日の私たちへの主からの強烈なメッセージです。

「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。

「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。

「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。

見ても見ても、導かれても導かれても、語っていただいても語っていただいても、私たちの心にはいつもすぐに黒雲が湧き出すのです。しかしイエス様はこう語られます。

「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。

20:28 トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。

20:29 イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。

私たちとともに、私たちの信仰のために主に肉薄してくれたトマスの勇気と信仰に感謝し、私たちも勇気と信仰をもって主の前に進み出、信じてひれ伏し、感謝と感激とをもって共に告白しようではありませんか。

「わが主よ、わが神よ」。

「わが主よ、わが神よ」。

「わが主よ、わが神よ」。

主はひれ伏す私たちの目前におられます。この教会の中心に、私たちの実在の中心に、主は確かに生きておられます。

見ないで信じる者は幸いです。この証しがあれば、トマスがそこまで徹底して私たちの代わりに主を確認してくれたのなら、私たちはこの記録をもって十分なのではないのでしょうか。そして見なくても信じられるのではないのでしょうか。

20:30 イエスは、この書に書かれていないしるしを、ほかにも多く、弟子たちの前で行われた。

20:31 しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

「これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである」

わが主、わが神であるイエス様を信じるということ。そのお言葉と御業を信じて、生けるイ

イエスは、父、子、聖霊の神は私たちのあらゆる困難を打ち破って私たちに救いをもたらしてくださるお方、永遠の命を与えるお方であることを信じて、信じ、願い、祈り、主に遣わされて救いを証しし、行動する者でありたいと願うのです。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。どちらを振り向いても信仰から逸れて恐れおののく弟子たちでしたが、イエスは忍耐強く彼らが信じる事が出来るように、そして信じて命を持つようにと導いてくださいました。そして私たちをも信じ続ける事が出来るように、見なくとも信じられるようにと導いてくださいます。本当にありがとうございます。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエスの御名によって祈ります。アーメン